

キャンパーの観察方法に関する一考察（第2報）

—— キャンパー評価票の得点変化を中心に ——

○谷戸 一雅 上野 幸 栗原 邦秋 川向 妙子
(余暇問題研究所) (東海大学)

キャンプ、観察、評価方法、カウンセラー

I はじめに

通常、組織キャンプ——とくに青少年のための——は、共同生活を通じての人間形成に重点がおかれる。その目標達成のために、さまざまな配慮（環境、プログラム、指導者など）がなされるが、その中でとりわけ重要な役割を果たすのがカウンセラーといえよう。

過去、わが国のキャンプ研究において、指導者に目を向けたものとしては、「キャンプカウンセラーの体格・体力とアンケート調査からみたコンディションの変化について」¹⁾「キャンプカウンセラーの言語行動分析」²⁾「キャンプリーダーの不安について」³⁾などがあげられる。これらは、指導者自身の資質や行動にかかわるものといえよう。

本研究の動機は、前述の人間形成の観点から、キャンプにおいて、キャンパーを指導するに当り、ひとりひとりのキャンパーの行動特徴、性格などを的確に把握し、効果的な生活指導を達成させようとしたことにはじまる。すなわち、カウンセラーがキャンパーを観察するにあたり、単に観察するのではなくドキュメントとして残すために、観察項目の設定（キャンパー評価票）を試みた。^{*}

この評価票作成にあたっては、既に60年前に実施されていたH-S-DimockとC-E-Hendry⁴⁾の手法を参考にして項目を選んだ。

普通、キャンパーを評価するには、キャンプ終了後に実施されることが多い。しかしながら、カウンセラーの観察力や評価の客観性を高めるためには、その頻度を増すことが必要と考えられることから、キャンプ開始前と終了後の2回にわたって実施することを試みた。

本研究は、以上のプロセスを経て、1983年の第13回学会大会において、「キャンパーの観察方法に関する一試み」⁵⁾として筆者らが発表した継続研究である。前回においては、カウンセラー別の評価法の差異、事前・事後の平均像の把握に重点をおいた。

今回の研究は、前回の結果をふまえ、主に各項目における事前・事後の評価点の差異、変化に焦点をあてることにした。

- この研究の対象となったキャンプは、グアムにおいて実施されている少年を対象としたものである。一年に2回（春・夏）実施され、小学校2年から中学生までが参加し、1987年で21回目を数える。その内容は、英会話、スノーケリングなど、グアムの特性を生かした一週間にわたるプログラムとなっている。

※表3・表4を参照

II 研究の目的

この研究の目的は、カウンセラーの資質の向上、とくにカウンセラーが、キャンパーを的確に把握し、効果的な指導への手がかりを得ることであるが、今回の具体的な目的としては、次の2点である。

1. キャンプの開始前と終了後における、キャンパー評価得点の差異の把握。
2. その差異が、性別、学年別によって特徴がみられるかどうかの検討。

III 研究の方法と分析

1. 調査対象

本研究の調査対象は、グアム海洋教室で指導にあたった7～15年の経験を持つ指導者とグアム海洋教室の参加者である。指導者は、事前に打ちあわせを行ない、共通理解を深めている。

それぞれの人数、構成は以下のとおりである。

表1 評価対象者数

性別	学年 期間	数字は人数			合計
		小2-4	小5、6	中学生	
男	61春期	39	35	8	82
	夏期	11	30	11	52
女	62春期	32	42	14	88
	夏期	30	47	9	86
子	62春期	10	22	11	43
	夏期	34	37	25	96
合計		156	213	78	447

表2 調査者数

性別 期間	数字は人数		
	男	女	計
61年夏	11	4	15
62年春	5	4	9
62年夏	11	5	16
合計	27	13	40

2. 調査期日

昭和61年春期 3月26日～4月7日
夏期 7月25日～8月7日

昭和62年春期 3月27日～4月4日

3. 調査方法

事前調査はキャンプの第一日目に行ない、事後調査はキャンプの最終日に実施した。

参加者は数グループに分かれ、それぞれのグループを担当する指導者が、担当するキャンパーについて評価票の記入を行なった。

調査項目は、事前調査が15項目、事後調査が事前調査の15項目を含む30項目となっている。この項目の設定は、第一印象でも確認できる項目を事前調査とし、それらに加えて、生活を共にしないと確認しにくい項目を事後調査とした。

事前・事後調査ともに5段階尺度で、直感的に該当する尺度に印をつけた。

4. 分析の方法

5段階の量化にあたっては、1点から5点までとして、事前・事後共通15項目の平均値・有意差を求めた。その上で、事前・事後、男女別・学年別による考察を行なった。なお、観察15項目は、次の4群に分類した。

- 1) 外見的要因 (5項目) … 素直だ・やさしい・明るい・おおらかだ・落ちつきがある
- 2) 几帳面さ (4項目) … 身のまわりの整理がよい・忘れ物をしない・時間を守る・身だしなみがよい
- 3) 対人的要因 (4項目) … 人づきあいがよい、ことばづかいがよい・よくしゃべる・人のいうことをよく聞く
- 4) 行動的要因 (2項目) … 積極的・協動的

IV 結果

全体的な傾向としては、事前調査より事後調査の方が平均値が高く、男子より女子の方が平均値が高くなっている。

1. キャンプの開始前と終了後で最も印象の変化がある面について

1) 男女別にみた場合 (図1・図2)

男子の場合 — 「明るい」の項目の変化 (事前調査平均値 3.2 → 事後調査平均値 3.6) と 「人づきあいがよい」の項目の変化 (事前調査平均値 3.1 → 事後調査平均値 3.5) が最も大きく (図1)、共に有意差があった。

女子の場合 — 「人づきあいがよい」の項目の変化 (事前平均値 3.2 → 事後平均値 3.6) と 「よくしゃべる」の項目の変化 (事前平均値 3.0 → 事後平均値 3.4) が最も大きく (図2)、共に有意差があった。

2) 学年別にみた場合 (図3～図8)

中学生男子の場合 —

「明るい」の項目 (事前平均値 3.2 → 事後平均値 3.7) と 「人づきあいがよい」の項目 (事前平均値 3.3 → 事後平均値 3.8) はやはり変化がみられ、また「積極的だ」の

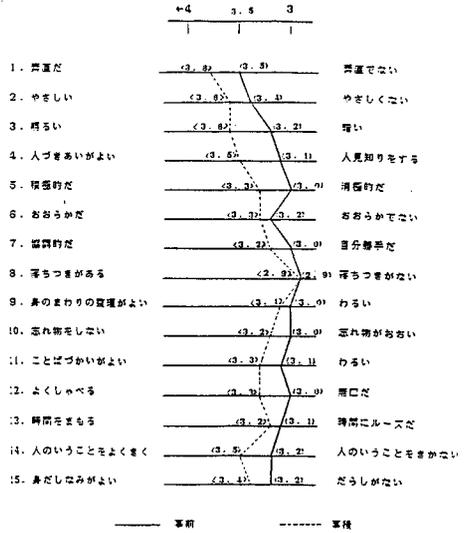


図1 事前・事後調査(男子) ※ () 内は事前、() 内は事後の平均値

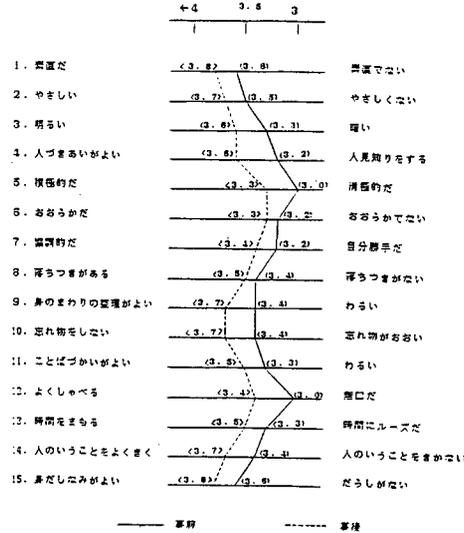


図2 事前・事後調査(女子) ※ () 内は事前、() 内は事後の平均値

項目 (事前平均値 3.0 → 事後平均値 3.8) も変化がみられた (図3)。この4項目は有意差があった。

小学校5・6年生男子の場合 —

大きな変化がほとんどみられなかった (図4)。

小学校2～4年生男子の場合 —

「素直だ」の項目 (事前平均値 3.3 → 事後平均値 3.7) と 「人づきあいがよい」の項目 (事前平均値 3.1 → 事後平均値 3.5)、 「人のいうことをよく聞く」の項目 (事前平均値 3.2 → 事後平均値 3.6) の3項目に

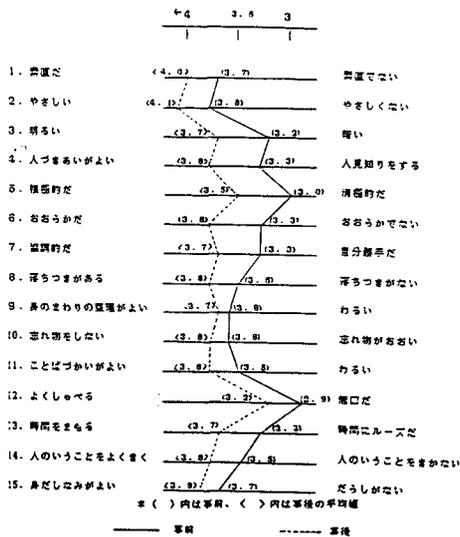


図3 学別別 事前・事後調査(男子・中学生)

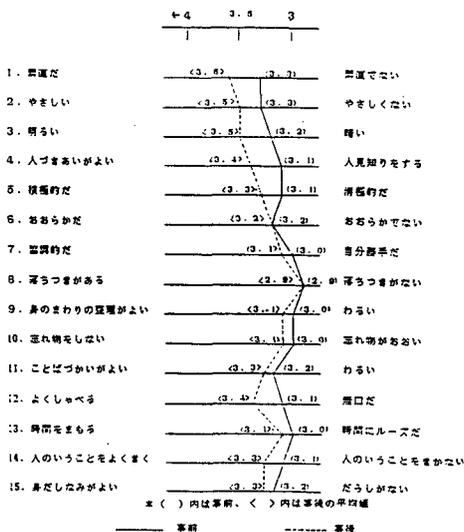


図4 学別別 事前・事後調査(男子・小5・6)

大きな変化がみられた(図5)。これらについても有意差があった。

中学生女子の場合――

「明るい」の項目の変化(事前平均値3.1→事後平均値3.7)が最も大きく、次いで「積極的だ」の項目の変化(事前平均値2.9→事後平均値3.3)が大きい(図6)。

小学校5・6年生女子の場合――

男子と同様に大きな変化はみられなかった(図7)。

小学校2～4年生女子の場合――

「人づきあいがよい」の項目(事前平均値

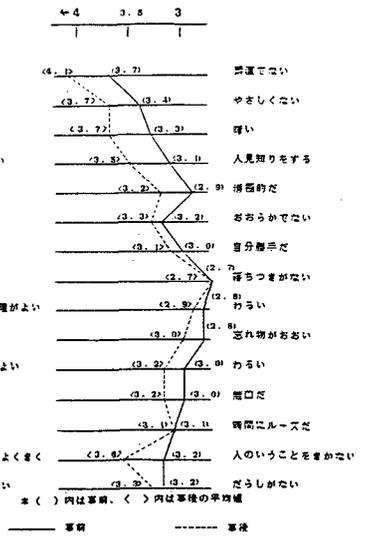


図5 学別別 事前・事後調査(男子・小2-4)

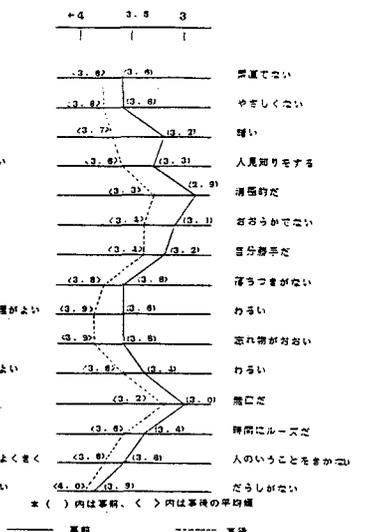


図6 学別別 事前・事後調査(女子・中学生)

3.2→事後平均値3.7)と「よくしゃべる」の項目(事前平均値3.0→事後平均値3.5)に大きな変化がみられた(図8)。これらの項目についても有意差があった。

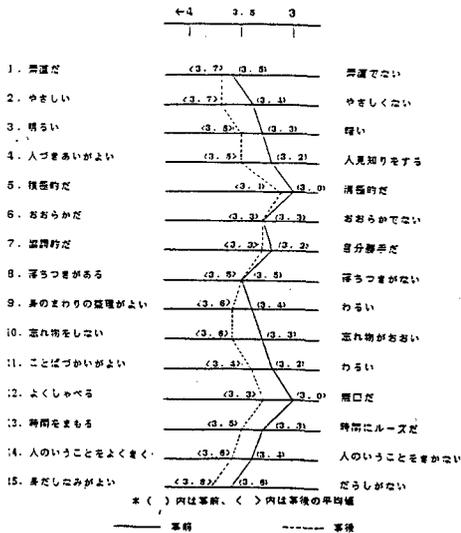


図7 性別別 事前・事後調査〈女子・小5・6〉

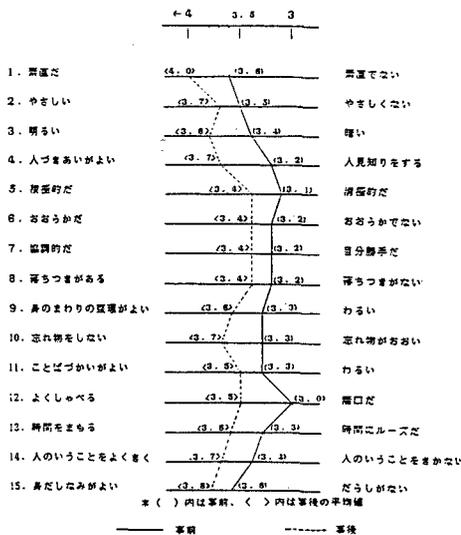


図8 性別別 事前・事後調査〈女子・小2-4〉

この結果から、男女共に中学生と小学校2～4年生については、大きな印象の変化が2～3項目にみられるのに対し、小学校5・6年生はほとんど印象が変わらない結果となっている。また、中学生では「明るい」と「積極的」の項目、小学校2～4年生では「人づきあいがよい」の項目が男女共通している。

全体的に開始前より終了後の方が平均値はよくなっていることから、「暗い」印象から「明るい」印象へ、「人づきあいがわるい」印象から「人づきあいがよい」印象へ、「消極的」な印象から「積極的」な印象へ、「無口」な印象から「よくしゃべる」印象へ多少の変化があったといえよう。

2. キャンプの開始前と終了後で印象の変化がみられない面について

1) 男女別にみた場合(図1・図2)

男子の場合——「落ちつきがある」の項目(事前・事後平均値2.9)は変化がみられなかった。

女子の場合——「おおらかだ」の項目(事前平均値3.2→事後平均値3.3)と「落ちつきがある」の項目(事前平均値3.4→事後平均3.5)は、ほとんど変化がみられなかった。

2) 学年別にみた場合(図3～図8)

中学生男子の場合——

変化のみられなかった項目に該当するものはなかった(図3)。

小学校5・6年生男子の場合——

「おおらかだ」の項目(事前・事後平均値3.2)と「落ちつきがある」の項目(事前・事後平均値2.9)については印象の変化がみられなかった(図4)。

小学校2～4年生男子の場合——

「落ちつきがある」の項目(事前・事後平均値2.9)と「時間を守る」の項目(事前・事後平均値3.1)は変化がみられなかった(図5)。

中学生女子の場合——

男子中学生と同様に該当する項目はなかった(図6)。

小学校5・6年生女子の場合——

「おおらかだ」の項目(事前・事後平均値3.3)と「落ちつきがある」の項目(事前・事後平均値3.6)は変化がみられなかった(図7)。

小学校2～4年生女子の場合——

中学生と同様に該当する項目はなかった(図8)。

この結果から、キャンプの開始前と終了後の印象に変化のない項目は、小学生に多く、また、「おおらかだ」と「落ちつきがある」の項目に集中していることがわかる。

V 考察

前述の結果から若干の考察を試みたい。

1. 男女別にみた場合

男子では「明るい」、「人づきあいがよい」について、「よくしゃべる」「人のいうことをよく聞く」など外見的要因と対人的要因に差異がみられ、すべてプラスに変化している。

また女子では、「人づきあいがよい」「よくしゃべる」について「身のまわりの整理がよい」「物忘れをしない」など、几帳面さの要因、対人的要因に差異がみられ、これもすべてプラスに変化している。

これらを考察すると、男子においては、一見、暗さやいわゆるツッパリのなげきを与えるキャンパー像を持つ傾向が見

られるが、一週間のカウンセラーとキャンパーの共同生活において、観察することによって初見とは異なる可能性を示唆していると解される。したがって、男子に対する外見・対人要因の観察には、十分留意する必要があるといえよう。

また、女子にあっては、対人・几帳面さにおいて初見とは異なることが多い場合があることを示唆しているといえよう。

さらに、男女共通して、対人的要因があげられるのは、はじめはおとなしくみられがちであり、顔見知りが少ないことから日数も少ないが、キャンプによって対人関係がより親密になることが、この結果から明らかにされた。

2. 学年別にみた場合

男子においては、明らかに小学生と中学生の差がみられる。すなわち中学生は、小学生より外見的要因と行動的要因に大きな変化がみられる傾向にあること、中学生には、一般にはじめての人に対しては「てれ」あるいは「暗さ」を感じさせる傾向にあることが同われる。

また、中学生が几帳面さにおいて小学生よりも平均値が高いことは、過去の共同生活体験にかかわる問題として、その重要性も推測できる。

女子においても、中学生と小学生では差がみられる。その傾向は男子とはほぼ同様である。

男女共に共通して言えることは、中学生と小学校2～4年生では、印象の変化が2～3項目みられた。しかし小学校5・6年では、事前・事後ともほとんど変化はみられなかった。これは小学校2年から中学校3年までの成長・発達の著しい段階において、ある程度幼児性の残る小学校低学年、それに比べると中学生は「大人に近い」という印象を持つ傾向にあると言えるよう。

VI まとめ

以上、男女別、学年別に考察を試みたが、今回対象とした指導者の持つキャンパー像の変化について次のような知見を得た。

1. 男女別にみた場合

男子は、「明るい」「人づきあいがい」「よくしゃべる」「人のいうことをよく聞く」など、外見的要因と対人的要因がすべてプラスに変化した。

これは第一印象にとらわれることなく、十分な外見・対人的要因に関する観察の必要性があるものといえよう。

一方女子は、「人づきあいがい」「よくしゃべる」「身のまわりの整理がよい」「忘れ物をしない」など、几帳面さ、対人的要因がプラスに変化した。

女子においても男子同様、キャンパーの観察には十分留意する必要があるといえよう。

さらに、男女共通してプラスに転じたものは対人的要因であった。これはどのキャンプにおいてもみられると思われるが、数日間の共同生活を通して、キャンパー相互、カウンセラーとキャンパーの親密度が増すことを表わしているものと考えられ、キャンプにおける共同生活の意義を認識できる。

2. 学年別にみた場合

男子では、小学生と中学生に差がみられた。中学生は小学生より外見的・行動的要因に大きな変化があった。一般的に思春期を迎えつつある中学生の特性と、小学生の差を観察する必要も重要だといえよう。

女子においても小学生と中学生に差がみられた。大きな変化が見られた項目は、男子同様に外見的・行動的要因に変化が認められた。

これらのことから、キャンプにおいて指導者は、キャンパーに対し初見の評価のみにとらわれず、また、キャンパーの発達段階を十分考慮した観察および接し方が必要であることを示唆しているといえよう。

今回の研究は、今まで実施した資料の一部であり、評価項目の変化に焦点をあてた。

今後は、さらに指導者の経験年数による評価の差の有無や、評価基準の検討が課題となろう。

表3 事前調査表

グアム海洋教室キャンパー評価表(1)
<事前調査>

担当のキャンパーについて、次の性格、行動時などをよく観察的に記入してください。
(数回欄に○印をつける)

キャンパー氏名	男・女	学年	小学 部	年
---------	-----	----	---------	---

	5	4	3	2	1	
1. 元気だ						元気でない
2. 明るい						暗くはない
3. 明るい						暗い
4. 人づきあいがい						人見知りをする
5. 積極的だ						消極的だ
6. 知らずかだ						知らぬかでない
7. 器用だ						器用でない
8. 高うつきがある						高うつきがない
9. 身のまわりの整理がよい						おろい
10. 忘れものをしない						忘れものをしない
11. ことばづかいがよい						わるい
12. よくしゃべる						静かだ
13. 仲間をさそふ						仲間をさそふ
14. 人のいうことをよく聞く						人のいうことをまかさない
15. 勇たしなみがい						だらけがない

特記事項

インストラクター名	
記入日	年 月 日

表4 事後調査表

グアム海洋教室キャンパー評価票(Ⅱ) (年)

過去のキャンパーについて、次の性格、行動特徴などをよく観察的に記入してください。
(該当欄に○印をつける)

キャンパー氏名	男・女	学年	学年	学年
---------	-----	----	----	----

	5	4	3	2	1	
1. 楽観的						楽観でない
2. やさしい						やさしくない
3. 明るい						暗い
4. 人づきあいがよい						人見知りをする
5. 積極的						消極的
6. かからず						押寄る
7. 協調的						自分勝手
8. 落ち着きがある						落ち着きがない
9. よくしゃべる						黙口
10. 人のいうことをまよ						人のいうことをまよ
11. 親切心がよい						親切心が少ない
12. まわりをよく気がつく						気がつかない
13. わざが強い						おまじない
14. 集団から卒業している						卒業して
15. 責任感がある						無責任
16. 自信がある						自信がない
17. ひかえがある						てしげ
18. 身のまわりの整理がよい						わるい
19. 忘れものが多い						忘れものが多い
20. ことばがよい						わるい
21. 時間を守る						時間ルーズ
22. 身だしなみがよい						だらしない
23. 食のむづかしがよい						食づかしがよい
24. 寝つきがよい						よい寝つき
25. かわやか						気取ったげ
26. しんか多量						元気な声
27. かわがよくなる						かわがよくなる
28. 寝つきがよい						寝つきがよい
29. 寝つきがよい						寝つきがよい
30. 性的興味がある						性的興味がない

特記事項

インストラクター名	
記入日	年 月 日

引用文献

- 1) 石川幸生「キャンプカウンセラーの体格・体力とアンケート調査からみたコンディションの変化について」日本体育学会第28回大会(1977)
- 2) 影山義光、茨城支部「キャンプカウンセラーの言語行動分析」日本体育学会第32回大会(1981)
- 3) 高橋伸「キャンプリーダーの不安について」日本レクリエーション学会第16回大会(1985)
- 4) Hedley S. Dimock and Charles E. Hendry「Camping and Character」(1929) P.144-164
- 5) 谷戸一雅「キャンパーの観察方法に関する一試み」日本レクリエーション学会第13回大会(1984)

参考文献

- 1) 氏倉寛・倉戸ヨシヤ・東山絃久編「臨床教育心理学」創元社 1986. 4. 1
- 2) 江橋慎四郎・今井鎮雄編「キャンプの基礎」日本YMCA同盟出版部 1987. 6. 5
- 3) 江橋慎四郎編著「野外教育の理論と実際」杏林書院 1986. 3. 20
- 4) 佐治守夫・水島恵一編「臨床心理学の基礎知識」有斐閣ブックス 1987. 1. 30
- 5) 佐野勝男著「性格の診断」大日本図書 1965. 1. 20
- 6) 松田稔著「ザ・キャンプ その理論と実際」創元社 1978. 3. 1
- 7) 間宮武著「性差心理学」金子書房 1979. 5. 20
- 8) Hedley S. Dimock and Charles E. Hendry「Camping and Character」1929 Association Press